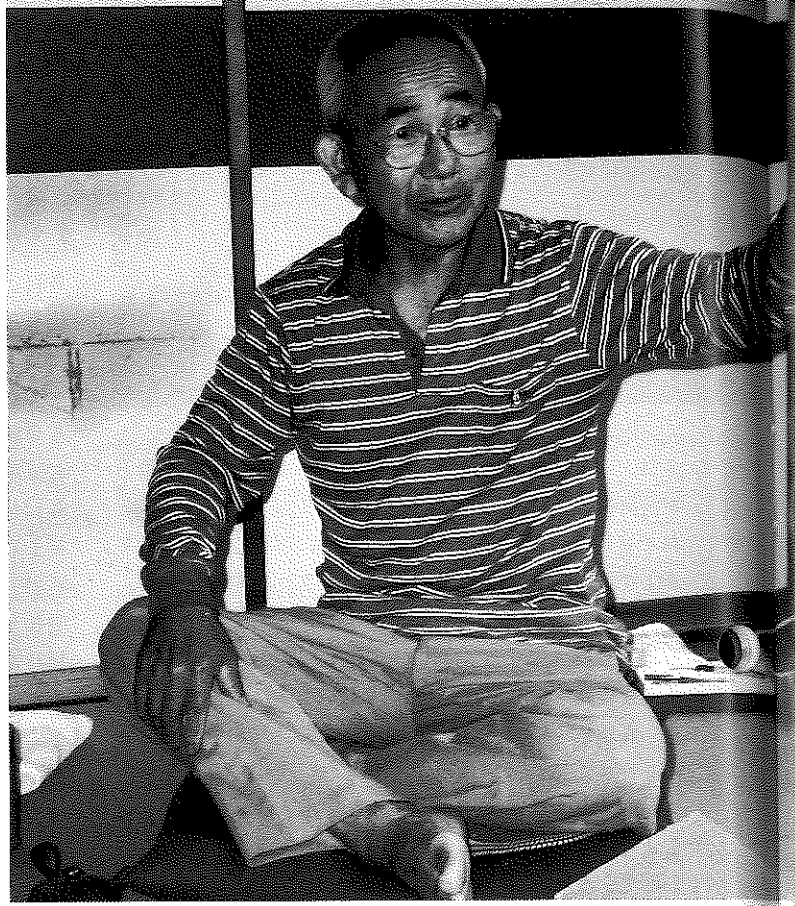
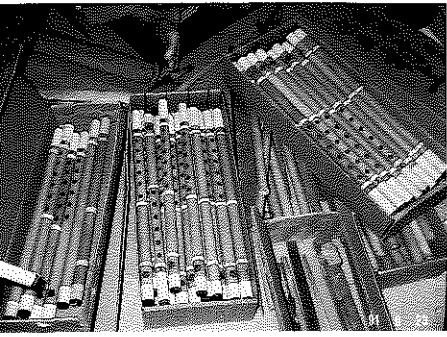
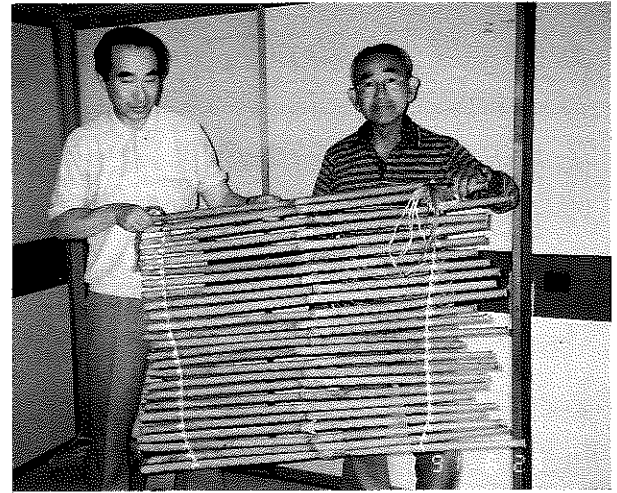


名人に
聴く



「竹内巳作氏」
篠笛の製作と演奏



(写真1)



篠笛製作のこと

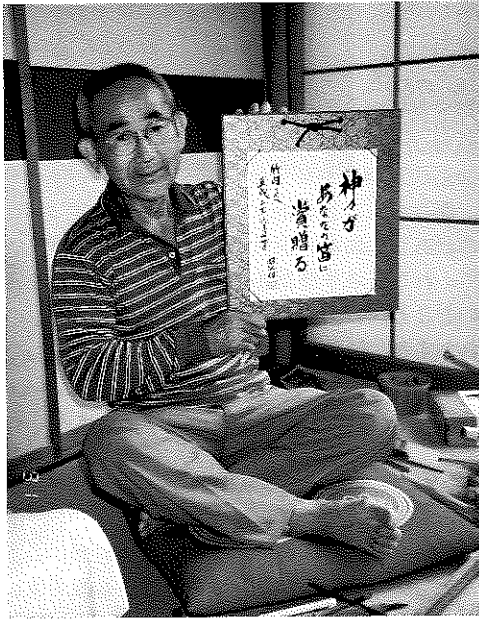
竹内さんは笛の名手でおられますが、横笛をお作りになるとか。その辺から教えて戴きたいと思います。まずこの近くに生えている篠竹を使ってお作りになるわけですが、いつ頃竹を切って来られるのでしょうか

竹はね、10月の末になるとまず眠るわけだ。水を上げている時は質が弱く上げなくなると丈夫になる。だから10月の末から11月と12月の内に切ってくるのです。

どれ位経ったものを切るのでしたか。そしてどうしてそれが判るのですか。———

3年経ったものを切ります。それは幹の所に皮が被さっているのが段々枯れて来て落ちそうになって来る。4年経つとそれが落ちてしまうので、4年以上のは5年か6年かは良く判らないけれども何となく固そうな色してくる。それでも良いのだが、3年目のものは見ればすぐ判ります。余り若い竹は折角細工しても縮れてしまって何にもならないし、作ろうとした時もう縮まっている。こんな事だけでなく慣れて来るともう見ればそれと判ります。どんなのが良いかと言うと、材質の薄いのが大体鳴りが良いのではないかと、厚いのはどうも鳴りが悪いと思います。それを凡そ43^分ほどの定規を持って切ろうとする竹に当ててみて、それ以上節の間の長さがあれば切るわけです。それから乾燥させるのでしたね。

そう。その切ってきた竹を三節の節を残して切り揃えてから、20~30本を簾の様に編んで軒下等に下げて干します。去年採ってきたのを丁度先程はすしたばかりですが、大体半年そうして乾かします。その後家の



世の中には本当に良く、「音楽」について知っている人がいるもの。特に私達の

身近に様々な生活をしているそれらの人の意見を聞くことも、同じ音楽をする者として大切なことではないでしょうか。

ということから年度始めの編集委員会でこのような欄を設けることになりました。

そこで早速この6月、事務局の機関紙担当の牧野内さん(写真担当)と編集部の私(聞き方)それに担当している大学院生(録音担当)の3人で新潟市から20kmほど離れた

新潟県西蒲原郡岩室村という所におられる

竹内巳作という方をお尋ねしました。

この方は篠笛を製作されると共にその演奏の名手であり、新潟県の横笛演奏会の「竹和会」の会長でもあります。

お歳は今年75才とのことですがなかなかお元気です。

今回は竹内さんのお宅で

前半は篠笛の製作について、

後半は音楽全般についてお伺いして参りました。(記:佐藤峰雄)

中に取り込んで雨風やお日さまに当たらない様に陰干します。これが凡そ2〜3年。こうして干したのが家には今7〜8千本はあると思います。今編んだのを持って来ます(写真1参照)。このまま余り長く下げて置くと割れてしまうのです。何でも物と言うのは自然に勝つものはなく、急に乾かそうとしても駄目で、自然に乾かすのが大事なんです。こうして乾かしても、割れない竹は3本に1本位なもので、それでも良い方です。また竹は太さが縮むだけでなく長さも縮むものです。だから45分の笛を作ろうと思って45分に切っても、乾くとそれより短くなってしまいます。それも竹によって縮む度合いが皆違うので、それやこれやで3分の1位残れば上等な方です。私も慣れて来たので千本位切るのは簡単です。作れば1日1本笛が作れるが、それでも300本。毎日こればかり作っている訳でないからこれで充分です。それでも良い竹を見つけるとね、切るのが好きなもんですぐ切ってくる。この村にはまだまだ良い竹がいっぱいあります。原発の角海(地名)の竹は揃ったものがいっぱいあって良いのだが地竹は数が少ないので切り惜い。竹は不思議に百本位固まって生えている所に良いものが多いのです。竹には不自由して



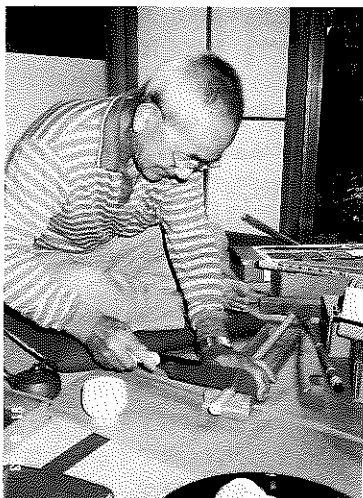
物置きにもこのように切った竹がいっぱい。頭上にも竹の入った箱がたくさん積んであった。

ませんが、作ってみると鳴りのいいのと悪いのがあるこれがどうしてか、竹が話してくれないので判りません。

その辺のところ、いよいよ笛作りに掛かれますが、節をどう扱うのかなど。――

節はね、細工する時割れると悪いので付けておくんです。長すぎるからといって節を切ってしまうと、竹の癖を直すのに火に焙ったりしてタメす時に割れてしまうわけだ。3つある内真ん中の節のちょうど上を切るのです。一本の竹から2本笛を作ることができます。切った節の所が笛の先になります(実際に作ってみせる)。その後で定規に合わせて長さを決めて切り、竹の中を棒ヤスリで一樣になるよう研ぎます。それから図面に合わせて指穴などの位置を竹の上書き(ここに竹内さん独自の

工具に工夫がみられる)、そこに初めは狂いが無いようにドリルで穴をあけ、そこを練り小刀で丁度いい様に開けていくのです。これがなかなか上手くいかない。全部の穴を開けてしまったら、中に塗料(カシュウ)を塗ります。それから笛の元に木を埋めて塞ぎます。この木は桐が細工し易くて一番いい様です。この詰め方が難しく、深い浅いで鳴りが全然違ってきます。これは吹きながら調整するのでここが難しい。前に出過ぎていると鳴らなく、多少後ろに、大体5割位に置くといいようです。楽器店にあるようなものは大量生産だから、この調整が良くないのが多い様です。これで良しとなったら最後に籐蔓を巻きまます。何を巻いてもいいのだが、笛には籐蔓が一番合う様に思います。これを巻かないと後



①

① 竹を切る。

② 竹の中を棒ヤスリで研ぐ。

③ 穴をあける位置を決める。

③

で割れる事があるので、これも大事な事なんです。

この笛は随分青いのですが。——

これは皆角海竹で、余り沢山採って来たので面倒になってしまい、編んで干さずにそのまま家の中に置いたところ色が出なくなってしまったのです。いい色を出すには風も雨も皆必要なんです。これでも7~8年経っているのです。



音楽のこと

竹内さんは「竹和会」の会長をなさっておられますがその後如何ですか。——

一人の人が余りうまいので他の人達がついて行かぬか派閥みたいなものが出て来た様で、なかなか難しいものですね。確かにこの人はうまい。笛では赤尾と言う女のの人がいるがそれより音色がいいと言う人もあります。私が聴いてもそう思う。大したものです。(この方は寺泊〈地名〉の人)

その方が岩室の笛を吹いたらどう

ですか。——

岩室甚句かね。それはだめだよ。よく言うのだが、神様の笛ばかりでなく「佐渡おけさ」や「岩室甚句」など他にも吹いたらどうかと。だけど覚えられないらしい。この人は神様の祝詞の時の笛しか吹けないのです。神主さんが忙しい時にはその代理もやっつけられるようです。

今度「花火の拍子」を私も一緒に吹いてみたいと思っているのですが。

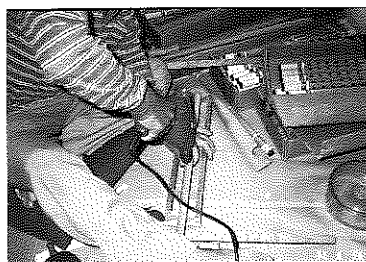
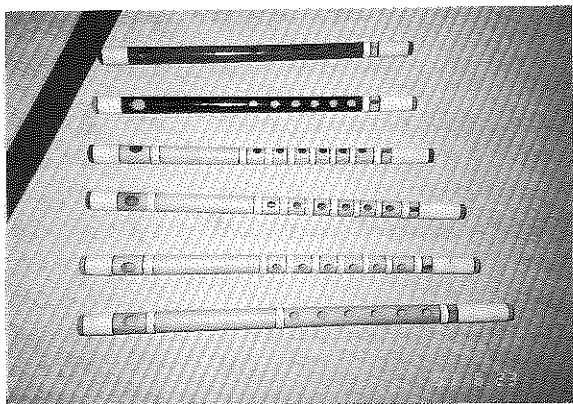
(和納には古来祭りの花火の時に同時に「拍子方」として笛・大太鼓・締め太鼓・法螺の12人程で音楽を演奏する風習がある) ——

和納の花火の笛は4号の笛だから、それで吹いてみて下さい。本当は短い方が息が楽でいいので、前に5号

の笛で吹いた事があったのです。そうしたら昔の人が「神様の前で吹く笛はやっぱり重々しい方がいい」と言うのでまた4号にしたのです。

竹内さんは「岩室甚句」の名手でおられますが、有名な歌手の歌などはどんなものでしょう。——

歌は上手だが踊りと一緒となるとどうもだめだね。浜田さん米谷さん三波さんなど歌ったのを持っているが、あれはやっぱりだめだね。踊り子たちも先生達の歌ったのでは踊られないといってます。歌は踊りに合わねばだめなんで、三波さんのは賑やかで早く、踊りが付いて行かれないんです。岩室の甚句は歌詞から言っても滑らかにゆったりした感じが大事なので、それを極端に何かやろうと

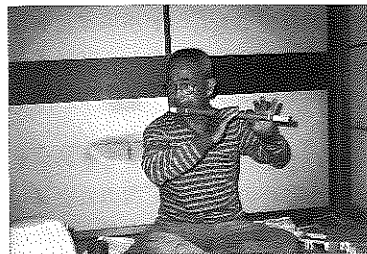


④

④ドリルで穴をあける。



⑤



⑥

⑤小刀で大きさを調節。

⑥吹きながら調整する。

しては駄目なんです（歌いながら説明）。専門にやってるのがその辺どうして判らんのか、どうも不思議です。

なるほど。所でこの前お伺いした時、竹内さんは笛の名手でありながら、新潟の笛は吹けないと言われましたがそれはどうしてなのでしょうか。

それはね。新潟の人が岩室の笛が吹けないのと同じことなんです。それは大体のところは吹けるが、ここの一番という細かい感じの所へ来ると、やっぱり少し違うんですね。岩室の笛なら私が一番上手だ、と思うのは私が岩室の者だからです。そうでないでしょうか。だけれど新潟のも覚えようと思っています。譜があるはずなんでそれで出来ると思うが、もう歳なのでなかなか覚えられないかも知れない。録音したテープがあるからと言って、テープと同じに自分が出来たと思ってもそれは違うところがいっぱいあるので、もしテープを聴いてそれと同じになる位なら先生はいらない事になる。先生が聴けば悪い所がいっぱいあるはずなんです。岩室甚句にしても、これは正徳3年に出来たというから、いまから278年前になる。それで私はそれらの由緒を全部調べて、その改良の跡のレコードを皆持っているのです。ところがカセットに探ろうとしたら78回転のレコードを回す機械が無いのには困ってしまい、ようやく探して来て直してもらってテープにとることができました。今から50年も前の唄はやっぱり余り上手くないので、それからまた改良されて今の唄になったのです。だんだん唄も変わって行く悪いので、今正調の岩室甚句を作るうとしている最中で、今夜もその会合を持つことになっています。

いつ頃から笛を作り始められたのですか（丸山）

弥彦に山際さんと言う方がおられて、昔新聞に笛作りのことを書かれたことがあり、それを見て尋ねて行ったのです。今から30年程前のことです。笛吹くのが好きだったので、



初夏の香りの蒲原平野

どんなにして作るのだろうと思って行ってみたのです。そしたらその爺さんは色々親切に聞かせてくれて、覚える気があれば教えてやると言ってくれました。初めの内は、折角教えてくれるのだが嫌になったら止めようという程の気持ちで習い始めたのです。そしたら割画面倒でなく簡単で、最初は穴一つでも大きくても小さくても駄目なものと思っていたらそうでない。穴の大きさはどうでも良く、その人その人の吹き方一つでどうにでもなる。笛はその人その人に合わせて作らねばならない事が判って来たのです。だから適当に穴を開けて色を塗れば、もうそれで笛になる。笛作りなんて簡単なものと判ったので、山際さんの所へ3年程時々行っただけです。先生の知っている事は皆覚えたので、後は様々に自分で工夫して、先生より良いことを覚えたのはそれだけ腕が上がっているわけで、例えば先生は籐ではなくて釣り糸を巻いておられたのです。

篠笛は12本で1組ときいておりますが（牧野内）

それぞれの声の調子で合わせるので、番号が多くなればなる程高くなる。笛は1から10まで大体ある。特別作ればその上も出来るが、10位で声の調子は皆合うので、それでやっています。笛吹く者はだから1本や2本持っていて駄目で一通り持っていなければならんわけだ。私の親

方は琴の4本目の絃の音と、4の笛で全部の穴を塞いだ音が同じようになるようにと教えてくれたので、琴から割り出したので13本の笛がある。楽器屋に在るのは10本までしかない。三味線と合わせる時は一つ穴を開けた音で合わせるが、皆その流義で違うようだね。

どんな人に笛が渡って行くのですか（牧野内）

神様は大体4本の笛だし民謡は8本位までだね（この本は号と同じ。竹内さんは営業として作っておられるわけでは無いので、返答に困られた様子）。新潟県全体の人に渡っているように思います。笛は男女によって上手下手はないので、どうか練習して下さい。

今日はどうも長居しまして、本当にありがとうございました。

こうして2時間程お話を伺ってから、竹内さんのお宅を辞し、弥彦神社を参拝してから緑の絨毯を敷詰めたような蒲原平野を新しい稲の香りの中帰路につきました。とにかくとても若々しく本当に笛を楽しんでおられる姿は、ほんの少しも着飾ってはおられませんが、それだけで美しく感じました。「その土地の人でなければそこの音楽は出来る筈はない。」と言う大変素朴な考えは、僅か20⁺しか離れていない土地でさえ別とする程の鋭敏な感覚を裏付けるものではないでしょうか。このような繊細さが、実は日本の音楽を支えている様に思えてなりません。とすれば、まるで別世界の音楽をやっている私共は一体何者なのでしょう。いずれにせよ考えさせられたひとときでした。

* * *

皆様方の身の回りにこのような名人と思われる方がおられましたら、ぜひ共本部編集部宛に御一報ください。（編集部）